「パタゴニア」にみるアメリカの環境保護意識

葛　西　武　士

私は「パタゴニア」というアメリカのアウトドア・ウェア・メーカーの製品を好んで使用している。「パタゴニア」は今、おそらく世界でもっとも注目されているアウトドア・ウェア・メーカーのひとつである。その企業理念は環境保護と高機能・高品質な製品作りを二本柱とし、非常にユニークかつラディカルなものである。ここではアウトドア・ウェア・メーカー「パタゴニア」を通して、アメリカの環境保護意識の在り方についてさぐってみた。

「パタゴニア」は 1993 年、世界で初めてペットボトルをリサイクルして作ったシンチラ・フリース（フリースの元祖）を発売し、現在に至るまでその原料のほぼ 100 パーセントを廃棄物（ペットボトル）に求めている。さらに 1996 年には、農薬を使用したコットン栽培による環境へのダメージを考慮し、総てのコットン製品の原料を有機栽培によるオーガニック・コットンに変更している。こうした生産活動そのものによる環境への貢献だけでは不十分だとして、1985 年以降はグラスルーツ（草の根）の環境保護団体や個人に多額の寄付をし、また 1993 年に作った「インターンシップ」制度では非営利の環境保護団体への参加を推奨し、その活動において社員に逮捕者が出るという事態にまで至っている。

こういった経済的・社会的リスクを冒してまで環境の保全を優先させる「パタゴニア」のラディカルさのルーツは 1950～60 年代にある。レイチェル・カーソンの『沈黙の春』の発表により、生態学（ecology）に指針を見出した環境保護（environmentalism）の段階に入った時期である。同じくしてゲーリー・スナイダーらビートニクスがこれまでのアメリカ社会に対し、詩や小説を通して異議を唱えていた時代である。そこでビートニクスらはオルタナティブな生き方を探るために東洋思想に注目し、日本の「禅」にヒントを求めたのである。彼らが学んだ「禅」の本質を一言でいうならば、「足るを知り、よりシンプルに」生きるということである。ゲーリー・スナイダーと交流の深い「パタゴニア」の社主イヴォン・シュイナードも「禅」に深く影響を受け、「より少なく、よりシンプルに」生きることを「パタゴニア」の商品開発と企業運営にそのまま反映させている。

20 世紀にアメリカがつくりだした大量生産・大量消費・大量廃棄という経済システムに異議を唱え、「パタゴニア」はアメリカの 1950 年代以降のカウンター・カルチャーの精神を、アウトドア・ウェア・メーカーという業種ではくくれない創作活動を通して世界に示してきた。これからの 21 世紀は環境の世紀になるといわれている。「パタゴニア」を通してみたアメリカの最先端のラディカルな環境保護意識のなかに、日本の「禅」の影響がみられることは驚きであり、日本のパタゴニアックのひとりとしてとても喜ばしいことである。「足るを知り、よりシンプルに」生きることは、後退ではなく前身であるということを「パタゴニア」を通して学んだ気がする。

（指導教員　中村　敦志）